

Title	効用価値学説史の一節
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1939
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.33, No.10 (1939. 10) ,p.1273(1)- 1311(39)
JaLC DOI	10.14991/001.19391001-0001
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19391001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

東京帝國大學經濟學會
經濟學論集

昭和十四年十一月一日發行 第九卷 第九號

論文

技術の影響の多様性に就いて……………馬場敬治
 —附 綜合化の傾向と技術の問題—

有限責任會社制度の生成……………増地庸治郎
 一九三七年ドイツ株式法の貸借對照表形式に
 關する規定に就いて(一)……………上野道輔

強制カルテルの本質と構造(二)……………高宮晋

資料

大阪商科大学經濟研究所編
 「經濟學文獻大鑑」第四卷商工篇上……………柳川昇

學界

〔書評〕 堀經夫氏著地代論史……………舞出長五郎
 —特に差益地代説を中心として—

〔紹介〕 オットオ・シュタイン「國家と經濟」……………難波田春夫

毎月一回發行
 定價十五錢
 送料一錢五厘
 六月三十一日

發賣所 有斐閣
 東京神田區保町
 振替東京三三七〇番

三田學會雜誌 第三十三卷 第十號

效用價值學說史の一節

高橋誠一郎

Hector, Brother, she is not worth what she does cost.
 The holding.

Troilus, What's aught, but as 'tis valued?

Hect. But value dwells not in particular will;

It holds his estimate and dignity

As well wherein 'tis precious of itself

As in the prize

ヘクター 弟、あの女にはとてもあの女を保留する費用だけの値打はない。
 トロイラス 何でもさうです、人が價值を附けなければ。

ヘクター 然し、價值は個人の意志ばかりでは定らない。其の者自身が貴い性質を具へてゐるから、價值が生ずる、評價者が値打を附けるばかりではない。

效用價值學說史の一節

(シェイクスピア「トロイラスとクレシダ」第二幕第二場)。

往々にして、經濟學史上に於ける眞の黄金時代は、一千八百二十三年に於けるデーヴィッド・リカードの死を以つて終ると稱せられる。加之、一部の學者は、經濟學者に取つて根本的興味を多くを有する何等の著書も、此の時以後に於いては著さるゝことがなかつたと信ずる。而も、斯くの如き觀察は全然正鵠を失するものであつて、英國に於いても、大陸に於いても、極めて顯著なる進歩は此の時期以後に於いて行はれつゝあつたのである。就中、特筆すべきものは限界效用學說の勃興であらう。而も、ウィリアム・スタンリー・ジェヴォンズ、カール・メンガー及びレオン・ワルラス等、歐羅巴文化の別箇の分派に屬する三人の學者が、各々獨立に研究の歩を進めて、實際上殆んど同時に、同一の見解に到達したと云はれてゐる近代的效用理論は、既に數十年に亙つて世上に流布して居つた理論を精練し完成せるものに過ぎない。殊に、英國に於いては、専らリカード學派のみが長く重視せられて居つた事實は此の國の殆んど總べての讀者を妨げて、絶えず效用價值理論を發達せしめつゝあつた佛、英、獨、伊、經濟學者の一系列の存在を長く知らしむることがなかつたのである。吾人は本誌第三十三卷第三號に於いて、第十九世紀前半の英國に於ける社會不安の裡に發生せる社會主義者及び反資本主義經濟學者等の言說に刺戟せられて夙に價值に關する限界效用說並びに利潤及び賃銀に關する限界生産力說の先蹤を出したるの事實を見た。

然しながら、茲に聊か注意すべきは、限界效用價值學說が次第に勢力を獲得して、勞働費價值學說若しくはあらゆる費用價值學說を壓倒せんとするの概を示すに至ると共に、生産費說全盛の觀ある近世初期に於いて夙に主觀的

價值說を主張せる者を以つて時流に抽んでたる卓見を表明せる者なるかの如くに思惟し、遂にはアンジェロ・ベルトリニ(Angelo Bertolini)教授の如く、フェルディナンド・ガリアニの如きを以つてカール・メンガー及びジェヴォンズの先驅者と思惟する者あることは是れである。吾人を以つて觀れば、ガリアニの價值學說上に於ける成績は舊來の效用及び稀少性原理より進んで費用原理を把握せるに存する。近世初期に於ける效用學說こそ却つて舊來の學的學說の殘骸であつて、當時の經濟的社會機構の進歩を直視して經驗的價值理論を打ち建てんとする者は多く勞働費說に赴かんとせるが如くである。

二

古代より中世を経て近世に至る迄、あらゆる經濟的推理に於いて、價值は效用に存することが一様に推定せられて居つた。古代希臘に於いて、プラトンは、國家は先づ其の結束力を人間の欲望に看出すと做し、吾人は個々別々では自足的でなく、而して吾人は悉く皆、多様の欲望を有するが故に、國家は人間相互の必要より生ずるものと觀た。(Rep. 369)。アリストテレスは、一切の生産物が測定せらるべき共通の標準を以つて需要(χρεία)であると觀た。需要は實にあらゆる商取引を接合し、社會を結合する紐である。即ち、彼れは價值の普遍的尺度を以つて、貨幣に於いて共通の尺度を看出す人民の諸欲望であることを主張する。(Eth. Nic. V. 5. 7)。古代羅馬に於いては、夙に價格は全然賣買當事者の任意に由つて定まるべきものと做すの觀念を生じ、早く既に十二表法に於いて價格の決定を市場の動搖に委し、價格が欲望及び效用に對して一定の關係を有するの事實が或る程度まで承認せら

れた。キケロは當時、プラクシテレース、ミューロン、ポリュクレイトス等の巨匠の手に成れる古代希臘彫刻の高價なるに就いて云々するに當り、「事實は是れ等のもの、評價が之れに對する需要に相當すると云ふに存する、吾人が人々の願望に對して限界を置くことを得るに非ざれば、是れ等のもの、價格に對して限界を置くことは極めて困難である」(Etenim qui modus est in his rebus cupiditatis, idem est aestimationis; difficile est finem facere pretio, nisi ibidini feceris.)と述べて居る。(Actionis Secundae in C. Verrem, IV. vii.)

アリステテレースは、前述の如く、需要の代理者を貨幣に求めて、價值形態のより、以上の分析を放棄した。然るに、事實上、價格は無制限なる契約當事者の合意に由つて定まり、「物の價值は其の賣られ得る所のものである」(Res tanti Valet quanti vendi potest) ことを以つて「一般觀念と做せる羅馬時代に於いても、交易の發達に連れて、正價若しくは眞價(verum rei pretium)の概念を生じ、皇帝ディオクレチアヌス(Diocletianus)は紀元三〇〇一年、其の勅令を以つて、慣習的生產費を基礎として正價を決定せんことを企圖した。(De Pretiis rerum venalium.)

羅馬帝國の崩壞後に至り、自給自足的なる經濟單位を以つて組織せられ支持せられて來た社會が交易及び商業の發達に由つて徐々に變化を來し、財貨は最早一家内に於いて消費せらるゝが爲めに生産せらるゝことなく、販賣を目的として生産せらるゝに至つた時、是れ等のものは如何なる對價に對して賣却せらる可きであるか、其の交換價値は如何にして公正の原則と適合せしめらる可きであるか、換言すれば、其の本然にして正當なる價格如何の問題が喚起せられた。而して、教會法學者は、交換せらるゝ一切の貨物は客觀的絶對的にして、究極に於いて生産費の

一般の見積に據つて決定せらる可き或る一定の眞價を有するものと觀た。中世の社會は身分的社會であり、各人は其の生れ出でたる社會的地位に従つて報いられた。而して總べての財貨又は勤務給付の價值は、之れを給付する者の社會的地位及び其の身分を維持するに必要な生活の程度に従つて決定せらる可きものと思惟せられた。斯くて、「一切貨物の眞價は又、之れを生産せる労働者の社會的地位及び之れに相當する生活標準に従つて見積られた該物件に投入せられた労働に依存する。斯くの如き學說は其の一面に於いて、工業資本が未だ重要な地位を占むるに至らずして、手工業者は自ら市場に赴いて原料を購ひ、自己の仕事場に在つて自己の道具を以つて勞作するものであつて、投入せられたる労働及び費用は恰當なる價格を説明せる當時の經濟社會の事情と適合するものであつた。斯くて、アルベルトス・マグヌスは、其のアリステテレースの『ニコマホス倫理學』註釋に於いて「労働及び費用 (labores et expensae) の同一なる堆積が相互に交換せられざるを得ず」と做して、アリステテレースの主觀的價值理論より出でて、而も、契約當事者の双方が其の生産物に對して、恰も他と等しき労働及び費用を投入したる場合に、交換上の正義は存するものと觀、公正の觀念と適合す可き客觀的價值學說を提唱したのである。(Ethica, lib. v. tract. ii. cap. 7.)

大アルベルトスの弟子、聖トーマス・アクイナスも亦、同じくアリステテレースの『倫理學十篇』第五編の註釋に於いて、交換の均等は又「労働及び費用に於ける」(in labore et in expensis)均等、即ち兩財貨が其の上に費されたる労働及び費用に關して均等なる可きことを意味する旨を注意した。然しながら、彼れは遂にアリステテレース

の本來の見解に復歸し、欲望が價値の眞尺度なりと云ふ結論に到達した。(Hoc autem unum, quod omnia mensurat, secundum rei veritatem est indigentia.) (Divi Thomae Aquinatis, doctoris angelici, tomus quintus, complectens expositionem in decem libros ethicorum et in octo libros politicorum Aristotelis, 1612, p. 66.)

三

都市經濟時代、顧客生産時代の靜止的價格、慣習的市場價格に於いて其の費用價值學說的表現を看出せる中世的正價論は、臆がて商業の發達に伴ひ、殆んど生産費を知ること能はざる遠隔地方の財貨が、地方市場に供給せらるゝこと漸次多きを加ふると共に、交換をして平等ならしめ、價格をして公正ならしむる客觀的標準と見失ひ、次第に效用價值學說的色彩を濃厚ならしめた。斯くて第十四世紀の佛蘭西スコラ哲學者ビュリードン(Jean Buridan)は、物の價値は人間の欲望満足に對する其の能力に依つて測定せらる可きものであると觀た。(Valor rerum aestimatur secundum humanam indigentiam.) 但し、彼れに従へば、這般の能力は、其の或る特殊個人の所要を満足するの力に據つて量定せられずして、其の社會普通の成員の所要を満足するの力に據つて測定せらるゝのである。(Quaestiones super decem libros ethicorum Aristotelis ad Nicomachum, V. 19.)

一定のスコラ哲學者は又、價値の要素の一として、效用に加ふるに稀少性を以つてした。フィレンツェの大主教聖アントニオ(Antonio)は、價値を以つて、三個の要素の相互作用に由つて構成せらるゝものと説いた。第一は財貨の一般的效用(virtuositas)、第二は其の稀少性(raritas)、第三は個人に對して種々なる程度に於いて之れを快

適ならしむる性質(placibilitas)である。(Summa Theologica in quatuor partes distributa, II. 1. 16.) 斯くの如きは、疑ひもなく、價値に關する探求に於いて一步を進めたものには相違ないが、而も、交換をして均等ならしめ、價格をして公正ならしむる客觀的尺度を看出すこと能はざるに其の端を發したるものであつて、正價論は臆がて需要供給理論と爲り、競争價格の是認に終る可き運命を有して居つたのである。

而して、國王の貨幣改悪、並びに新大陸よりの貴金屬輸入に基ける通貨の價値下落、並びに之れに次げる物價の騰貴以後に於いて bonitas intrinseca の理論が valor impositus の其れに代るに至ると共に、金銀は其の效用と稀少性とに據つて其れ自身の價値を有すると做すの意見が行はるゝに至つた。(三田學會雜誌第三十三卷第一號所載拙稿「一千五百八十一年版グブルー・ユス・ヂェントルマン著種々なる人々の有する目下の不平の簡略なる検討」一〇七一—一〇九頁参照)。第十六世紀末に於けるライレンツェのベルナルド・ダヴァンツァチ(Bernardo Davanzati)及び第十七世紀末に於けるボロンナのヂェミニオ・モンタナリ(Geminiano Montanari)の所論は又、之れに屬するものである。(昭和七年版拙著「重商主義經濟學說研究」四二—二五〇頁及び二五四—二五六頁参照)。

斯くの如き間に於いて、國民的工業の發生發達は又、經濟思想上に重要な影響を及ぼさなければ已まなかつた。經濟論は次第に其の中心を、貿易の差額に由つて流出入する正貨の高より移して、是れに由つて影響せらるゝ國內の産業に置くに至つた。重點は流通より生産へ、市場より工業へと移行した。流通の範圍、即ち商取引に於いては、夥多及び稀少は諸物をして低廉若しくは高價ならしめる。經驗的なるもの以外に何等客觀的なる價値の尺度は存せ

すして、市場の駆引は價格を決定する。生産者間に於ける自由競争が存在することがないか、若しくは然らざる迄も、之れに對する拘束が多であつた時代には、價值を費用の要素に由つて決定するは不可能であつて、それが效用の要素に由つて決定せらるゝことは免れ得ざる所であつた。然しながら、生産者間に於ける競争が自由無障と爲ると共に、價值は自から生産費に一致せんとするの傾向を有する。斯くてグロシウス (Hugo Grotius) 及びブーフエンドルフ (Samuel von Pufendorf) の徒は、不足及び欲望を以つて價值の重要な要素と看做しながらも、生産費の要素を重視しなければならなかつた。(前掲拙著二五六—二六三頁参照)。而して、夙に商業主義より工業主義に移らんとするの概を示せる英國に於いては、第十七世紀の後半に於いて、労働を以つて單に價值を創造するのみならず、又以つて之れが尺度たるものと做せる「經濟學の父」サー・ウィリアム・ペチーを出した。(前掲拙著二六六—二六八頁参照)。而して、ペチーの思想系統を傳へて、費用價值の分析を進め、労働の價值の根本原因及び尺度を看出さんと努めたものに重農學派の先驅者「經濟學者」リチャード・カンテロンがあつた。(前掲拙著四三二—四三四頁参照)。而して、カンテロン及び重農學派の祖フランソワ・ケネーの價值論は機械的なるものであつて、彼れ等は人民の心意及び感情に對する總べての影響より離れて、自然に作用しつゝあるものと認められた諸原因に據つて價值を説明したのである。

ケネーを以つて觀れば、交換の見地よりすれば、價值は市場に於いて明かにせらるゝものであるが、全然賣手及び買手の一身上の事實に由つて決定せらるゝものではない。「價格は賣手若しくは買手の孰れの利益にも従ふもの

ではない。是れ等の利益其の者は、販賣及び購入に於いて、相反的地位に在るものである。斯くて別個に考察せられた賣手及び買手は全然產物の價格の裁定者ではない。「產物に關しては、其の時價の一般的原因が是れ等のものゝ稀少又は夥多、若しくは賣手又は買手の側に於ける競争の強弱に存すること、及び是れ等の諸原理に由つて、產物の實際の價格は是れ等のものゝ販賣——生産者が直接に行ふ場合に於いてすら——に先んずることを知らざる者はない」と。他方、生産の見地よりすれば、價值は労働者の生計に據つて測定せられた労働費用に基くものである。

「汝若し工業上の製作を行ふ労働者の利得を以つて、耕作者が土地の耕作に使備する労働者の其れに比較するならば、汝は兩方面に於ける利得が労働者の生計に限定せらるゝこと、這般の利得は富の増加に非ざること、並びに、工業製品の價值が、恰も労働者及び商人の消費する衣食の價值其の者に準ずるの事實を看出すであらう。斯くて工匠は、彼れが其の労働によつて生産するに等しき生活資料を破壊するのじである。」(Les Grains.—Oeuvres économiques et philosophiques, 1888, p. 233.) 其の著 De l'intérêt social par rapport à la valeur, à l'industrie et au commerce intérieur et extérieur. (De l'ordre social, ouvrage suivi d'un traité élémentaire sur la valeur, l'argent, la circulation, l'industrie, le commerce intérieur et extérieur, 1777. 〇第一卷)に於いて、價值の起源を明かならしめんとせるル・タローム (Guillaume François Lefebvre) は、之れが諸原因を列擧し、其の第一を效用と做し、是れを以つて、「一物件をして價值を有せしむるが爲めに缺く可らざるものと觀てゐるのであるが、而も、それが價值の尺度と非ざることを指摘するに苦心しつゝある。」(Eugène Daire, Collection des Principaux Economistes; Physiocrates,

1846, I, p. 980.)

四

斯くて、生産費説は漸次效用説に代らんとするの傾向を示し、單なる效用及び稀少性に據つて經濟價值現象を説明せんとする論者も亦、人間の努力に依つて數量を増加せられ得るものであつて又其の生産に對しては自由競争の無制限に作用する貨物に在つては、勞働費用が市場價值を規制することを主張せんとするに至つた。

自然法學説を奉じて居つたジュネーツの法學者ジャン・ピュルラマック(Jean Jacques Burlamaqui)は、古典派經濟學の濫觴と略々其の時を等しうして、效用を以つて、交換價值の前提と做すと共に、是れを以つて、其の高さの上に影響を有せざるものと認め、其の動搖は偏へに財貨の稀少性の變化に由つて説明せらるゝものなることを教へた。價值に影響を與へ得るあらゆる他の事情は是れ等のものが稀少性を變ずるが故に、又、變ずる限りに於いて價值の上に間接の作用を爲すに過ぎざるものである。(Elements du droit naturel, 1775, 3me partie, ch. xi, p. 194 ff.)

ナポリの人フェルディナンド・ガリアニ(Ferdinando Galiani)は其の二十二歳を數へたる一千七百四十九年の匿名の著 Della Moneta Libri cinque. (一千七百五十年四ツ折判)一卷としてナポリに於いて發兌、再版は著者の名を署して一千七百八十年に刊行せらるゝに於いて、價值が人間の感情に依存すると做すの意見を表明した。彼れ曰く、余は信ずる、人は、尊重(dignité)若しくは價值を以つて、「或る人の概念に於ける一物件の領有と他の物件の領有との間

の比率の觀念」であると稱することを得ると。這般の比率は、自己の享樂を破毀せらるゝことなからんことを慮る者が一を以つて他と交換し、而して損得なき限りに於いては、兩物件間の均等である。斯くて價值は當だに吾人が一物件に就いて有す可き感情のみならず、這般の感情と之れに對して與へられなければならぬ或る物に對して有す可き感情との間の比較の上にも亦依存する。人間の意向は變化するが故に、諸物件の價值は變化する。「一方に於いては、時價と稱せらるゝを得る所のものを有する一般に求めらるゝ諸物件が存する。他方には又、之れを欲求する者、及び之れを拋棄する者の個人的願望より其の價值を取得する諸物件が存する。(Della Moneta di Ferdinando Galiani Napolitano.—Scrittori Classici Italiani di Economia Politica, Parte Moderna, Tomo III, 1803, p. 58.)

ガリアニは、價值が合成的概念であり、效用及び稀少性(utilita e rarita)の算法に依つて分析せられ得るものであると認めた。最有用物件たる空氣及び水は稀少性を缺くが故に、交換價值を有することがない。之れに反し、日本の海岸から齎された砂は、何等の效用をも有せざるが故に、大なる稀少性を有するに拘らず、毫も交換價值を有することがない。(ibid., p. 58-59.) 彼れは、「一物件が吾人に幸福を得せしむるが爲めに有する素質(attitudine)を效用と呼ぶ。彼れは吾人が食、飲及び眠の欲望及び欲情の外、是れ等のものが満足せらるゝ際に生ずる他の欲望及び欲情を有することを注意し、而して效用に従つて財貨の分類を行つた。有用物件の系列中に在つて、第一のものは元素である。之れに次いで人間が來る。人間は總べての物件の中で他の人間に取つて最も有用なるものである。

第三は榮養に資する諸物件、第四は被服に役立つ諸物件、第五は居住に資する其れであり、而して最後にはより重要ならざる貨物として、又、人間の第二位的願望満足のため役立つ其れが来る。(Ibid., p. 50, ff.)。「天然の積は黄金の積よりも尊いが、然も其の評價せらるゝこと如何に是れよりも低きや」とか、「麴麩の一斤は黄金の二斤よりも更らに有用である」とか稱するは、恥ず可き論過(paralogismo)であつて、斯くの如きは、「より以上若しくはより以下に有用である」と云ふは相對的の名辭であり、而して是れ等のものゝ重要性は人々の種々なる状態に相應するの事實を知らざるに基くものである。(Ibid., p. 67-68.)

斯くの如く、ガリアニは、先づ貨物貨幣をも包含する貨物の價値を效用、換言すれば、人間の所要を満足す可き一物品の能力に依存せしめたる後、之れを稀少性の改修的影響に服せしめる。而して、彼れは稀少性を定義して一物品の現存しつゝある分量と其の使用との間の關係と做してゐる。使用は嘗だに破壊のみではなくして、或る人の之れを使用する間、そが他の者を満足し得ざる底の一物件の占有である。諸物件の破壊及び商業よりの撤去は共に殘存せるものゝ價格を引き上げることが出来るが、而も前者は後者よりも一層然るものである。(Ibid., p. 72-73.)

ガリアニは次いで任意に再生産し得る貨物と然らざる物との間に區別を設ける。數量に關して二種の物件が存する。第一は大地の產出物及び動物の如く、其の數量が自然に依存するものであり、第二は勞働に依存するものである。第二種の物件の數量は勞働に比例する。(Ibid., p. 73-74.)。勞働を分析するに際しては、考察せらる可き三個の要素が存する、使用せらるゝ人々の數、費さるゝ時間、仕事の相異なる品質が是れである。一相の端物の如く、

其の價値は其の仕事を上ぐるに必要な時間中使用せらるゝ人數の榮養に等しい一定の物件が存する。費さるゝ時間の分析には、休憩に費さるゝ時間並びに休日に費さるゝ時間をも亦、考察することが必要である。一人が一ヶ年内に三百日勞作して、二百足の靴を生産するとしたならば、是れ等の靴の價値は彼れの二ヶ年間の榮養に相應す可きである。他の人が三百六十日勞作して二百二十足の靴を生産するとしたならば、彼れは前者よりも五分の一方安く是れ等のものを賣却することが出来る。蓋し、彼れは、前者が其の二百足の靴より受けたる所のもの以上の利得を一百二十足の靴より受くるの必要を有せざる可きが故である。一定の勞働は、美術に於けるが如く、其の性質上、不斷に實施せらるゝことを得ざるものである。長き徒弟年期を要し、親達に大なる費用を課する技術も亦、より高價に支拂はれる。斯くて、松又は胡桃は、其の生長遅々たるの故を以つて、白楊又は榆よりも高價である。人間の種々なる技能の價値は無生物物件の價格を支配すると同一の諸原理に由つて支配せられる。神慮は、農業の如き、最必要なる技能を最普通のものたらしめた。農民等は人間の麴麩及び酒の如きものであつて、哲學者等は貴金屬の如きものである。(Ibid., p. 75-79.)

斯くてガリアニは曰く、余は今、價値の依存する諸原理に就いて十分に説いた、人は今や、是れ等の諸原理が確實、不變、普遍であり、且つ此の世界の事物の秩序及び本性に基礎を有するものであつて、此の世に於いては、何物と雖も、專斷にして偶然なるはなく、總べては秩序と調和と必然とであることを知ると。價値は區々ではあるが、氣まぐれではない。其の變化すら、一の秩序、一の正確にして不變なる準則に従ふ。是れ等のものは觀念である、

而も、それが所要及び享樂の上に、換言すれば、人間の内部組織の上に、基礎を有するの時、吾人の觀念は本質的に正當且つ鞏固である。(Ibid., p. 82-83.)。而して、彼れに従へば、流行(Hoda)は諸物件の使用によつて生ぜしめらるゝ享樂を變化せしむるに由つて、其の效用を變化せしむるの結果を有する。(Ibid., p. 83-85.)。メデイチのヴィナス女神像(Venere de Medici)の如き唯一の物件若しくは獨占業の産物の價值は無極若しくは無定限ではなく、購買者の所要及び願望、並びに販賣者の評價に相應する。(Ibid., p. 85.)。

然しながら、吾人は、價值を以つて容易に決定せらるゝものと思惟することを慎まなければならぬ。稀少性及び價值は消費に依存し、而して消費は價值に従つて變化するが故に、價值は先驗的に決定せらるゝことを得ない。問題は二つの未知量を包含し、斯くて又、未決である。(Ibid., p. 85-86.)。價格は消費に影響する。各消費者は諸物件を取得するが爲めに費す不便及び勞苦に従つて是れ等のものを願望する。不便にして大ならんか、彼れは寧ろ更らに價值少なき物件を使用せんことを欲する。其れ自體稀少性によつて支配せらるゝ價格によつて消費は支配せられる。凶作の年には、價格はより高くして、消費はより小である。即ち、一人民は單に、其の收穫に従つて、或る年にはより多く、他の年にはより少なく購入する一定の高を穀物に對して費すに過ぎない。價格が下れば、願望は増加する。斯くて均衡は保持せられる。價格は水平を求めんとするの傾向がある。(Ibid., p. 86-87.)。

本書中に於けるガリアニの主題は貨幣であり、其の企圖は、貨幣は社會の因襲よりして其の價值を取得せずして、恰も他の貨物と等しく其の價值を取得する旨を明かならしむるに在つた。而して斯くの如き企圖は彼れを導いて一

般價值の原因を説明するに至らしめたのである。彼れは夙にロックの貨幣論を翻譯し、之れに註記を施したのであるが、這般の註記は本書の核心と爲れるものであつた。然しながら、彼れの體系は當時一般に承認せられて居つたロック及びカンチロンの其れとは共通なる何物をも有せざるものであつて、寧ろ自國のベルナルド・グヴァンツァチ及びデミニアノ・モンタナリの流れを汲む者と稱せられてゐる。彼れを以つて觀れば、貴金屬は、それが交換資料たるが故に、價值を有するに非ずして、價值を有するが故に、交換資料たるのである。斯くてガリアニは、國家危急存亡の秋を除いては、國王の貨幣改鑄を非議したのである。

然しながら、前述の如く、人間の勞働に依つて生産せらるゝ財貨の場合には、價值は生産の期間を通じて要求せらるゝ勞働者の數其他に由つて決定せらるゝと做すに於いて、ガリアニは勞働價值説を採れるの觀がある。ジャン・バチイスト・セイは、アダム・スミスの學說の基礎の或るもの、就中、勞働は諸物件の價值若しくは富の唯一の創造者なりと做すの意見が本書中に包含せらるゝ旨を述べてゐる。(Traité d'Economie Politique, 6me. éd., 1941, p. 20-21.)。而も、這般の學說はガリアニの時代に先き立つ半世紀餘の昔に於いてジョン・ロックによつてよく展開せしめられた所であり、而して又、ガリアニは熟くロックの著作に通曉せるものであつた。

之れを要するに、ガリアニの價值論は、伊太利亞社會の經濟的機構漸く進み、生産者間に於ける自由競争に對する抑制次第に撤去せられて、貨物の價格は自から其の生産費に適應するの傾向を生じたる時代の産物である。

本書の如き伊太利亞に於いて出版せられた幾多の貨幣論中に在つて最良のものゝと看做さるゝ所のものが果し

て能く年齒僅かに二十一の青年によつて述作せられ得るやは屢々疑問とせらるゝ所であつて、ガリアニは、かのナポリに於いて商業及び機械學講座の名の下に歐洲最初の經濟學講座を設置し其の友人ジューノーヴェーモンテ (Antonio Genovesi) をして其の最初の教授たらしめたる博識なるマッテレンツォの僱イメンテ、フリヤ (L'abate Bartolomeo Intieri) 及びリヌキニ侯爵 (Il marchese Alessandro Rinuccini) 侯に負ふ所甚だ大であつたと云ふ嫌疑を受けた。而して本書が苦心彫琢の結果に成れるものであり、莊重且つ哲學的なる語調を以つて記述せられ、彼れの後年の著 *Dialogues sur le Commerce des Bles*, (*Dialoghi sul commercio dei grani*) 1770. の輕快活潑なる趣きを毫も有せざるの事實に由つて這般の疑念は一層濃厚と爲つた。(cf. *Scrittori Classici Italiani*, op. cit.; p. xvii-xxii; Jean-Baptiste Say, *Traité*, op. cit., p. 20; J. R. McCulloch, *The Literature of Political Economy: A Classified Catalogue of Select Publications in the different departments of that science, with historical, critical, and biographical notices*, 1845, p. 190.)。然しながら、本書を以つてガリアニの眞著に非ずと斷ず可き確實なる證左は未だ發見せられざるものゝ如くである。彼れは幸運なる經濟論者であつて、本書中に於ける論述に據つて、後年の限界效用學派の先驅者と稱せらるゝと共に、前記 *Dialoghi* に於いて、抽象的原理は商業政策の安全なる嚮導者ではなく、一定の時若しくは一定の場所に於ける良好なる穀法は、他の時、他の場所に於いては不良なることある可きを論じて、重農學派の自由貿易論に反對し、後年の歴史學派に等しき態度を示せるものと稱せられてゐる。

五

ガリアニは人間の欲望があらゆる價値の原因たることを説くに満足せずして、進んで貨物の價格が其の生産費に歸向することを述べたのであるが、而も此の國に於いては、猶ほ需要供給説は其の命脈を絶たなかつた。ロッキの *Two Treatises of Government*, 1690. 及び *Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money*, 1692. 並びに *Further Considerations concerning Raising the Value of Money*, 1695. を翻譯せるバンツィーニ (Giovanni Francesco Pagnini) は其の著 *Saggio sopra il giusto prezzo delle cose*, *La giusta valuta della moneta e sopra il commercio dei Romani* 中に於ける價値理論に於いてはロッキの學說に倣ふことなく、寧ろブーンフェンデルフの其れ(前掲拙著二五七—二六一頁参照)に依據した。彼れは特に、ブーンフェンデルフが、諸物は皆だに其の自然的實體に基くのみならず、又、一定の精神的考量に従つて價値を受くるが故に、價値を決定する「自然的」定量の外に、「精神的」定量も亦、存せざる可らずと説けるの點を注意し、彼れによつて偶々設けられたる是れ等兩定量間の區別に加工を施した。彼れは、自然的定量によつて交換せらるゝ目的物の量を表示し、精神的定量によつて、取得せんとする者の願望、財貨が這般の願望を満足するに適するの程度、並びに其の時々々に競争する人々の數を意味する。自然的定量の増加は財貨の價値を下降せしめ、精神的定量の増加は之れを上昇せしめる。(ibid.—*Scrittori Classici Italiani di Economia Politica*, Parte Moderna, Tomo II, 1803, p. 157 ff.)。斯くの如く需要供給理論を主張せるバンツィーニは唯り實際市場價値の存在のみを承認して、自然價値若しくは正常價値の存在を承認することがなかつたのである。Osservazioni sopra il Prezzo Legale delle Monete, 1751. の著

者たるトスカナの政治家ネリ(Pompeo Neri)は、有用性を以つて、あらゆる價値の基礎と做すと同時に、總べての價値が有用性に比例せざるの事實を認めて、價値決定上に於ける財貨の稀少性及び其の取得の困難を強調した。(ibid.—Scrittori Classici, op. cit., Parte Antica, Tomo VI, 1804, p. 127 ff.)

曩きに一言せる穆和なる重商主義者ジェーノーヴェーシは其の *Lezioni di Commercio ossia di Economia Civile* (一千七百六十五年初版、同六十八年より七十年に亙つて兩卷より成る再版刊行)に於て、*prezzo, pregio, stima, valuta, valore*等の如き無差別に使用せらるゝ言辭が相對的のものであつて、絶對的の言辭に非ざること、並びに是れ等の諸語が内在的品質に適用せらるゝものに非ざること、を明確に指摘した。貨幣は尺度たるの觀を具へ、又、最も之れに近きものではあるが、嘗だに物件のみならず、其の價格が歸せしめらるゝ究竟の尺度は人間其の者である。人間の存せざる所に於いては、何物と雖も價値を有することがない。而して、人間の稀少なる所に於いて低廉なる價格を有する物件と同一のものが、多數の人民の存する所に於いては極めて高價を有するのである。而して、物及び勤務が遠隔なる地方よりも首府に於いて遙かに高き價格を有する所以のものは茲に存する。而も、人々は、彼れ等が物若しくは勤務を欲望することなくしては、之れに價値を與ふるものではない。是に於いて乎、吾人の欲望は萬物の價値の第一根元であつて、價格は吾人の欲望を満足せしむる力である。人間の欲望は三種より成る。純然たる必要の其れ、快樂の其れ、並びに奢侈の其れである。何物と雖も、是れ等の欲望に關する外は價値を有することがない。而して、諸物の價値は吾人の欲望を満足する其の力に比例する。即ち、ジェーノーヴェーシ

は種々なる種類の抽象的重要性に従つて、需要の相異なる度位を區別し、而して單に少數の欲望を満足するに過ぎざるもの、若しくは單に時々之れを満足するに過ぎざるものよりも、繰返し繰返し一個の欲望を満足せしむる物件が高き價値を有する。彼れは大なる欲望を満足せしめ得るものは、小なる欲望を満足せしめ得るものよりも大なる價値あることを主張した。而も、彼れは何故に奢侈品が概して必需品よりも多くを費さしむるかの問題に逢着するに至つて、稀少性の原理に依らなければならなかつたのである。而して、彼れは這般の意見を如何にして上述の所論と調和せしむ可きかを知らなかつたのである。即ち、彼れは價格が常に供給及び需要によつて決定せらるゝ、所以を明かにせる後、論結して言ふ、(一)人々の欲望はあらゆる物及び總べての労働の價値の第一根元である、(二)穀物、油等の如き同一物件の價格は常に欲求及び品質に正比し、供給に反比すると。而して後、彼れは價値を以つて需要の子であると稱してゐる。(ibid.—Biblioteca dell' Economista, Prima Serie, III, 1852, p. 180 ff.)

I veri mezzi di render felici le società, 1772、を著せる重農學派の流れを汲むるパオロ・パオレティ(Ferdinando Paolotti)も亦、費用の要素を全然排除し、價値を以つて全く效用によつて支配せらるゝものとして表明せる論者たるの觀あるものであつて、物は人間の欲望によつて價値を保持する。斯くて、商品の價値若しくは價値の増加は、工業的労働の作用ではなくして、労働者の出費の結果である」と説いたのであるが、(ibid.—Scrittori Classici, op. cit., Parte Moderna, Tomo XX, 1804, p. 198.)、而も、彼れは重農主義的立場よりして工業の不生産性を主張するに當り、或る新工場手工業が出現すると共に、そは其の國の内外に延長し、直ちに他の工業經營者及び商人の競争は

價格を其の公正なる水平に壓し下げる、而して這般の水準は原料の價值及び労働者の生存費に由つて決定せらるゝと稱して居つた。(ibid., p. 204-205.)

古典的刑法學派の祖ベッカリア(Cesare Bonesana, Marchese di Beccaria)は其の *Elementi di economia pubblica*. (本講義は、一千七百六十八年、伊太利亞に開かれた第二の經濟學講座、即ち奧大利政府によつて彼れの爲めにミラノに設けられた經濟學講座を擔任せる彼れが同六十九年より七十年に互つて起草せるものであるが、第一講を除いては一千八百〇四年に至る迄は出版せらるゝことがなかつた)に於いて、一財貨の交換價值を以つて、需要に正比し、財貨の高に反比して、増減するものと説き、這般の一般法則によつて自然物の價值を説明するも、而も、ガリアニと等しく、一財貨の生産及び準備が、人間の労働に負ふ限りに於いては、價值が這般の労働の高、即ち必要な労働時間及び労働者の數によつて決定せらるゝものと觀た。而して、兩個の割合は、労働時間中に消費せらるゝ生活資料の確定によつて單一のものに分解せられる。(ibid.—Scrittori Classici, op. cit., Parte Moderna, Tomo XI, p. 344 ff.)。尙ほ之れと同様の見解を有するものに、トスカナの大公、後の神聖羅馬皇帝レオポルド(Leopoldo)の治下に於いて重要な地位を占めて居つたファブロンニ(Giovanni Fabbroni)があつた。

工業の生産性を主張して、重農學派に反抗せるベリ(Pietro Verri)は、價值を以つて、人々が或る物件に就いて行ふ估料を表示する言辭なりと做し、欲望及び稀少性を以つて價值の動因と觀た。第一の動因の強度は最もよく買手の數に於いて推知せられる。財貨の稀少性に關しては在荷の絶對量を意味するに非ずして、事實、交換に提供せ

らる可き高のみに就いて云ふのである。彼れはあらゆる價格の變化が供給及び需要の變化より發することを闡明し、價格の移動は買手の數に正比し、賣手の其れに反比を爲して起るものであると稱してゐる。而して、彼れは「欲望」(bisogno)を以つて、或る財貨に對する願望と同一視す可きものに非ずして、寧ろ、人が其の所望する貨物に對し、彼れが之れに代へて交付せんとするものに優りて與へんとする選擇(*la preferenza*, *l'eccesso della stima*)であると稱した。されば、一貨物の取得に對する願望が、恰も貨幣の之れに相當する高を保持せんとする希望と同一の強度を有するとしたならば、是れ等の兩願望は互に相殺し、貨幣の所有者は、斯くの如き場合には、概して何等の中出をも行ふことなかる可きである。是に於いて乎、交換は兩交易對象が其の評價を異にし、自己の所有するものよりも、要求せらるゝ所のものが高く評價せらるゝの事實に基くのである。(Meditazioni sulla Economia Politica, 1771.—Biblioteca dell' Economista, Prima Serie, III, p. 555 ff.)。斯くて、彼れはベッカリアの友人であり、彼れに示唆を與ふることが多かつたと言はれてゐるが、而も其の價值理論に於いては専ら價值法則を需要供給原理に歸せしむることに努めて、自然價值概念に到達することがなかつたのである。

然るに、第十八世紀に於けるヴェネチア經濟學者中に在つて最も卓越せるものと稱せられてゐるオルテス(Giam-maria Ortes)は折衷的の立場を探り、初め需要及び供給より價值を推論し、其の作用を算術的法式によつて説明せんとし、價值が一財貨の需要(*la ricera de' beni*)に正比し、其の消費し得る高(*la massa consumabile*)に反比をなすを觀たのである。即ち、 $V \propto \frac{1}{H}$ である。財貨の總額は貨幣の總額と同價值に置かれ得るものと做したダヴァンツ

マテの意見は、オルテスに在つて、一國民の財貨の總額は精確に其の國民の總欲望に相應するものと思惟せらるゝと做すの形態を取つたのである。是れに由つて、彼れは、一國民の財産の總價值を計算するが爲めに「 Π 」なる法式を立て、斯くて此の總價值が常住不變なる可しと云ふ結論に到達した。同時に是れよりして或る價值の上昇は、常に或る他の價值の下降によつて伴はれると云ふ結論を生ずるのである。或る財貨が無限に大なる分量に於いて存在すること、例へば、空氣及び水の如くであるならば、其の法式は「 $\forall \Pi = \Pi$ 」と爲る。之れに反して、一財貨が無限に稀少なること、誠の愛及び之れに類するものゝ如くであるならば、價值は又、無限である。「 $\forall \Pi = \Pi \infty$ 」。而も、彼れは後に到つて、生産及び運輸に使用せらるゝ労働の數量及び品質によつて測定し、是れに由つて又、首府に於ける諸貨物の價值大なることゝ、此處に流通する貨幣の數量大なることを説明したのである。(Della economia nazionale libri sei di Giannaria Ortes Veneziano, 1774—Scrittori Classici, op. cit., Parte Moderna, Tomo XXII, 1804, p. 44—49.)。彼れに従へば、貨幣は單に富の記號に過ぎざるものであつて、斷じて富其の者であると考へられてはならない。貨幣を富と思ひ違へる者の誤謬は或る物の等價物と其の物其れ自體の混同、若しくは、同一物でないに拘らず、同一物と考へらるゝ兩等價物の混同から生ずる。(Ibid., cap. 8.)。彼れは經濟法則を自然法則と等しく不變のものとして看做し、斯くて單に特殊の利益よりして經濟學を見んとする其の時代の一般の見解に對峙したのである。

斯くの如く、第十八世紀の伊太利亞に於いては、主として貨幣理論の分析と關聯して、價值理論の論述行はれ、單に價值を以つて需要供給に由つて支配せらるゝものと觀る者と、更らに進んで自然價值の概念に到達せんとせる者とを問はず、效用を強調せる多數の經濟學者を出したのであるが、總がて彼れ等の或る者は其の影響を佛蘭西經濟學者の上に及ぼすに至つた。

六

前述せる身長四呎半の小法師ガリアニは一千七百五十九年、巴里駐劄ナポリ大使館書記官に任命せられ、總がて幾許もなく公使と爲つた。彼れは巴里社交界の寵兒であり、當時の名流と思想的交換を行ふの機會を多く有して居つた。アンヌ・ロベール・ジャック・チュルゴオは彼れに做つて、感情を通じて作用しつゝある條件の結果として、心理學的に價值を説明した。彼れの價值論は先づ彼れの經濟學上に於ける名著 *Reflexions sur la Formation et la Distribution des Richesses*, 1766. 中に看出される。洵に彼れは其の系統的經濟論を通じて、心理學的要素を看逃すことがなかつたのであるが、而も、彼れと雖も未だ全然重農學派の唯物主義から脱却することを得なかつたのである。

チュルゴオは「省察」中に於て、「商品評價の原理」(Principe de l'évaluation des choses commercables)を説き、吾人が隔絶獨立せるものとして、各個の交換を考察する限りに於いては、交換せらるゝ諸物各個の價值は相互に均衡する契約當事者の欲望若しくは願望並びに資力以外に何等の尺度をも有せざるものであつて、之れを決定するものは彼れ等の意志の合致以外に存することのないものであると做してゐる。(Ibid., § XXI; Œuvres de Turgot et

Documents le Concernant avec Biographie et Notes par Gustave Schelle, Tome II, 1914, p. 552.)。次いで、彼れは時價 (la valeur courante) が商品の交換に際して如何にして定まるかに就いて述べる。斯くの如きは双方に於ける需要者の競争に由るものであつて、結局、一貨物の賣手全體の欲望及び能力と、之れに對して交換せらる可き他の貨物の賣手全體の其れとの均衡によつて決定せられる。種々なる供給と種々なる需要との中間の價格は、あらゆる買手及び賣手が其の交換に於いて一定す可き時價と爲る可きである。(ibid., § xxxii; p. 553.)。商業は各々の商品に對し、あらゆる他の商品に關して時價を與へる。(ibid., § xxxiii; p. 553.)。各々の商品は是れを以つてあらゆる他のものゝ價值を比較するが爲めの共通の尺度若しくは秤量として役立ち得るものである。(ibid., § xxxiv; p. 554.)。而も、あらゆる商品は斯くの如く本質的に他の一切の物を代表し、其の價值を表示するが爲めの共通の尺度として、又、交換の方法に依つて是れ等のものゝ總べてを取得するが爲めの一般的質物として役立ち得るの性質を有するものではあるが、總べてのものは等しき便宜を以つて、是れ等の兩目的に使用せらるゝを得ない。従つて、品質上大なる相違を容るゝことなく、主として數量に關して價值を有するものが、慣習上、當然比較の秤量として選擇せらるゝに至つたのである。(ibid., § xxxv; p. 555.)。

次いで、チュルゴオは一千七百六十七年三月二十五日附デーヴィッド・ヒューム宛書翰に於いて、労働の報酬が供給及び需要間の關係に據つて決定せらるゝ旨を述べ、而して、這般の原理が商取引に於いて價值を有する物件の總べての價格を決定せるものと做した。而も、斯くの如く、供給及び需要の關係に據つて設定せらるゝものは「時

價」(prix courant)であつて、物質財及び労働は他の價格、即ち「基本價格」(prix fondamental)を有する。チュルゴオは基本價格なる名辭によつて、價格若しくは賃銀が其れ以下に降ることを得ざる限界を意味する。商品に取つては、這般の水準は生産費に由つて決定せられる。一度び這般の價格にして到達せられんか、當該貨物を製造し若しくは耕作することは最早有利ならざるに至る。同様に、労働の基本價格は是れ以下にては如何なる人間も勞作することを欲せざる賃銀である。一度び這般の水準にして到達せられんか、工匠若しくは農業上の日稼人は他の市場に於て其の熟練を賣らんが爲めに移住するか、若しくは教區の負擔たるに至る可きである。(Œuvres de Turgot, op. cit., Tome II, 1914, p. 663.)。

七

曠がてチュルゴオは又、重農學派の純收益論及び單一課稅論に對する堅實なる反對者であつたナントの收稅官 (Receveur Général des Fermes) ルイ・フランスマン・グラスマン (Louis François de Graslin) が一千七百六十七年に匿名を以つて公したる Essai Analytique sur la Richesse et sur l'Impôt, où l'on réfute la nouvelle doctrine économique, qui a fourni à la Société royale d'agriculture de Limoges; les principes d'un programme qu'elle a publié sur l'effet des impôts indirects, を熟讀して、是れに由つて動ざるゝ所が多かつた。グラスマンは本書中に於いて、第一に、土地の收益は、何等の純收益も存せざる時、即ち耕作費が其の收益の價值に等しき時に於いてすら富であること、第二に、土地によつて生産せられた原料品を使用する勤勞は土地の生産力に於けると等しく眞に

富であることを立證せんことを企圖した。(ibid., p. 11.)。彼れ曰く、凡そ如何なる場合に於いても、價值を生ぜしむるものは皆だに自然のみではなくして、又、人間の労働であると。(ibid., p. 14 ff.)。然も尙ほ、劣等地上に於いて收得せられた小麥の一定量は、優等地より生じた同一品質の小麥の同一量に比し、縱令ひ、前者の生産が後者の其れよりも著しく大なる費用を投ぜしむる場合多かる可きに拘らず、更らに大なる價值を有することなきは明かなる所である。而して、安直なる機械仕事の援助に依つて加工せらるる材料と、手仕事に由つて加工せらるる其れとの間にも亦、事實上、價值の相違が存する。斯くの如き難件は如何にして解釋せらる可きであるか。グラスランは、具體的労働若しくは費用に代へて、平均的に必要な労働若しくは費用の投入の觀念を以つて之れを解決せんとすることなく、却つて之れを欲望に委ねる。價值の屬性は物の本質に對して無關係なるものである。其の根原は人間中に存する。そは人間の欲望と共に増減し、又、是れと共に消滅する。(ibid., p. 51.)。

斯くの如きは、何等の比較をも想定することなくして、欲望が其の目的物と一定關係に於いて存すると共に生ずる絶対價值(valeur absolue)である。一個の價值の存する場合、即ち相對價值(valeur relative)は如何にして起るか。富は欲望の目的物の一切より成るものであり、欲望の目的物は、欲望の度位と稀少性の度位の複比例に於いて相對的價值を有する。爰に、グラスランは欲望の觀念を最廣義に解釋し、是れに由つて、必要、有用、趣味(Le goût)、及び快樂(Le plaisir)等を意味せんとする。(ibid., p. 24.)。多くの人は、自然的欲望(besoins naturels)と人爲的欲望(besoins factices)とを區別し、而して、財貨の價值を考察するに當つては、唯り前者のみを承認せんとする。然

しながら、人間の願望のあらゆる種類は、其の結果に對する願慮によつてのみ經濟生活の考察に取つて問題と成るのである。而して這般の結果は恰も欲望せられた目的物の交換價值(valeur venale)に外ならざるものである。而も、斯くの如き結果は、欲望が自然的と稱せらるゝと否とに拘らず、實際上常に同様である。人は敢て、欲望なる語を斯くの如く限定せられた方法に使用せるが故に、彼れは價值論に對しても亦、あらゆる種類の物欲に共通する他の表明法を求めなければならなかつたのである。(ibid., p. 35. remarque.)。グラスランは、財貨に交換價值を賦與する欲望中に純然たる氣分をも包括して居るが、而も、人間の願望に對する彼れの意見は、一個人若しくは單に極めて少數の人間の希望のみに關することのない範圍に於いてのみ考察せらるゝことを彼れは言明してゐる。(ibid., p. 49.)。

彼れに従へば、第二に知られざる欲望は概して問題と爲ることがない。第二に、其の欲望の對象たる物件を其の消費に適する數量に於いて所有する人は、恰も彼れが富み得る限り富めるものであつて、斯くて又、更らに多くの欲望を識り同じく又是れ等更らに多數の欲望の對象物件を所有する自餘の人と恰も等しく富めるものである。人間の富の總量は不變なる總價值を有する。(ibid., p. 32 ff.)。人間の性質が變ぜざる間は、相互に相等しき各個の財貨の種類は常に同一なる總價值を表示する。人間の性質が變化して、其の欲望が變化するに至つたとしたならば、是れに由つて財貨の種類に之れに相應する推移を惹起する。あらゆる財貨の總價值が一千であると假定する。そは一定の欲望の度盛に従つて、四百、三百、二百、一百の割合に於いて、全體で四種類の財貨に分配せられる。

今、従来の四種類の欲望に加ふるに、新たなる六種類を以つてし、斯くて又、新たなる財貨の種類に價值を賦與するとする。而も、全財貨の總價值は依然として一千である。斯くて舊四種類の欲望對象物各個の減價は、例へば其れ共れ八十、六十、四十、二十、合計二百と爲り、價值の合計即ち富の總高は、三百二十、二百四十、一百六十、八十、即ち、總體に於いて八百に降り、殘餘の二百は、六十、四十五、四十、三十、十五、十と云ふやうに、新たに生じた欲望の對象たる他の種類の財貨に對して分配せられなければならぬ。一種の財貨の各部分的數量の價值は、一方に於いては、其の種類の財貨の總價值、即ち正常なる人間の抽象的欲望に依存し、他方に於いては又、其の種類の全體に對する當該部分の大小、即ち稀少性に依存する。例へば、小麥の數量が二倍と爲つたならば、一定量の價值は、是れに由つて、其の養分に有したる價值の半ばに減少する。之れに反して、總量が減少するならば、一定量は之れに應じて價值を高める。而も、稀少性の概念は相對的であつて、常に消費者の數に依存する。(ibid., p. 25)。貨幣の價值に關しては、其の内在的價值(valeur intrinsèque)は、それが貨幣たる其の特性に於いて有する價值と共同なる何物をも有することがない。然しながら、貨幣としての其の價值に關しては、其の總價值は其の代表する財貨、即ち、正さに循環しつゝある總べての對象の總價值と必然同一なる可きものである。而も、其の總價值が不變であるとしたならば、貨幣の其れも亦、不變でなければならぬ。従つて、貨幣の購買力は單に其の定量によつて騰落する。(ibid., p. 53 ff.)。(Dr. Rudolf Kaula, Die Geschichtliche Entwicklung der Modernen Werttheorien, 1906, S. 128-131.)

八

チュルゴオは此のグラスランの著が現れて後、幾許ならずして起草せられた其の未定稿 Valeurs et Monnaies に於いて、價值現象を單純なる心理的構成事實の上に遡らしめ、原因的、發生的に之れを觀察せんとした。(此の未完成論文は一千七百六十九年の交に起稿せられたものと看做されてゐるが、而も之れには聊か疑問なきを得ない)。彼れは本論文中に於いて先づ「價值」(valeur)の語源に就いて述べる。拉丁語に於ける valere から出た「價值がある」(valoir)なる動詞に相當する此の抽象名詞は、本原的には、力、元氣を意味するものであつて、這般の意味は今も valide (健全なる)、invalide (虚弱なる)、convalescence (恢復)等の諸佛語中に保持せられてゐる。valoir なる語は普通の用法に於いては、此の語及び valeur なる語が商業上に於いて與へられたるものとは相違せる意味を有して居るが、而も、そは其の第一の基礎たるものである。valoir は自然の贈與及び財貨が、吾人の享樂に對し、吾人の願望の満足に對し、適應するものと看做さるゝ吾人の欲望に相對せる良好性を表明する。或る者はシチウツ料理が其の嗜好に適せざる時、是れを以つて何等の價值なきものと云ふ。「悪い」「通常の」「良い」「優れて良い」等の形容詞は、此の種の「價值」の種々なる程度を特記する。這般の良好性は常に吾人に對して相對的ではあるが、而も、吾人は價值なる語を適用するに際しては、其の目的物に内在的であり、而して是れに由つてそが吾人の使用に適合せしめらるゝ眞實の性質を思考する。(Œuvres de Turgot, op. cit., Tome III, 1919, p. 84-85)。

「價值」なる語の這般の意味は、他の人間と交渉を有することのない孤立せる人間に取つても生ずるであらう。チ

ユルゴオは單一の目的物の上に其の能力を行使する人間を考察する。斯くの如き人間は、之れを探求するか、之れを避くるか、若しくは無關心に之れを放棄するであらう。第一の場合には、疑ひもなく、彼れは這般の目的物を探求するの動機を有する。彼れは之れを其の享樂に適せりと判斷する。彼れは之れを「良い」と看出し、而して、此の相對的良好性は絶對的に「價値」と名づけらるゝことが出来る。然しながら、斯くの如き「價値」は他の「價値」と比較せらるゝことなきが故に、測定せられ得ることなく、又、此の「價値を有する」(value) 物件は毫も「價積らるゝ」(evaluate) ことがないであらう。同一の人間が其の使用に適する若干の目的物の間に選擇を有するとしたならば、一を他のものよりも選ぶ可きである。彼れは是れ等の物件の中、其のものが他のものよりも「一層價値がある」と判斷する。彼れは其の心中に於いて「是れ等のものゝ價値」を比較し、之れを評價す可きである。彼れは、是れに由つて、彼れの選擇せる物件を引き受け、而して他のものを棄て置くことを決意す可きである。然しながら、斯くの如き「價積」(evaluations) は何等固定せるものを有することなく、其の人の欲望が變化するに従つて刻々變化する。(Ibid., p. 85.)

最初、此の孤獨の人は、單に現在の享樂のみを比較し、斯くて又、單に現在の享樂に對する關係に於いてのみ諸物を評價する。然も、臆がて將來の享樂も亦、其の計算中に入るに至り、現在に於いては享樂に貢獻することを得ないが、之れを保持する場合には、將來の一定時に於いて享樂に貢獻す可き諸物に於いても亦、價値は見積られる。是に至つて、其の人は彼れの欲望間に比較を行ひ、嘗てに現在の欲望の急速なる衝動に對するのみならず、種々な

る欲望の必要及び效用の順序に對して目的物の探求を適應せしむることゝ爲るのである。急迫の程度を異にする效用の順序が均衡せられ、若しくは變更せらるゝ他の諸考察に關して現るゝ最初のものゝ下は、其の物の卓越性(excellence)、即ち、之れを探求せしむる願望の種類を満足する大きさの程度を異にする其の適格性(aptitude)である。此の卓越性の順序は其の結果たる評價に關して效用の順序に聊か反映する。即ち、這個卓越性の程度によつて生ぜしめらるゝより生々とした享樂の快感は、其れ自體、人をして、彼れが單一なるものゝ卓越性よりも豊富を選ぶ諸物件のより緊切なる必要と比較せしむる長所なるが爲めである。第三の考慮は、人が其の願望の目的物を取得するに際して當面する大きさの程度を異にする困難である。蓋し、等しく有用にして又等しく卓越せる兩物件の間に於いて、之れを再び探し出すが爲めに苦痛の多くを要し、又、自己の爲めに這般の物件を取得するが爲めにより、大なる注意と努力とを用ふ可きものは、彼れに取つてより、貴重なるの觀あることは極めて明白なるが故である。這般の理由に據つて、水は人間に必要であり、且つ多くの快感を得せしむるに拘らず、人が其の領有の確保を求めざる迄に其の潤澤なる國土に於いては貴重なるものと看做さるゝことがないのである。即ち、此の物質の豊富は彼れをして之れを其の手の下に看出さしむるが故である。斯くて、吾人が交換を行ふに至る以前に於いてすら、吾人は「稀少性」(rareté)を以つて「價積」の要素の二と認むるのである。チュルゴオは、茲に、獲得の困難に對する別名として稀少性なる文字を使用し、這般の概念をして效用の其れに歸せしめんとしたのである。即ち、彼れ曰く、「猶ほ稀少性に附せられたる這般の估料は又、特種の效用に基けることを一言するの要がある。蓋し、取得困難なる物件を豫

め準備することが一層有用なるが故に、それは一層探求せられ、而して、人は之れを我が物たらしむるが爲めに一層の努力を行ふ可きが故である」と。是れ等三個の要素は孤獨の人に關する價值決定に参加する總べてのものである。彼れは之れを呼んで「見積價值」(valeur estimative)と稱してゐる。即ち、それは實際上、全然正確に、人が其の願望の種々なる目的物に附する尊重の程度の表明なるが故である。(Ibid., p. 85-87.)

是に至つて、チェルゴオは孤獨なる人の場合に於ける各特殊價值の高を決定する所のもの、即ち價值の尺度を彼れに見せんとしたのである。彼れは這般の尺度を、人間が猶ほ未だ一人であり、自然のみが彼れの欲望に備へ、而して既に彼れは自然と最初の「商業」を營むが故に、彼れが其の願望の對象物を取得するが爲めに、斯くの如き自然との最初の交易に於いて支拂はざるを得ざる其の労働、其の諸能力及び時間の使用に看出したのである。彼れの資本は狹隘なる境界内に閉ぢられてゐる。彼れは其の享樂の總額を之れに割り當てなければならぬ。彼れは自然の宏大なる倉庫中に於いて選擇を行ひ、而して自己に取つて便宜なる種々なる目的物の間に、任意に處分し得る「價格」(prix)を分割しなければならず、其の生存と幸福とに對する其の「重要性」に従つて是れ等のものを「見積り」しなければならぬ。而して、這般の見積りは、等しく重要なるか若しくは一層重要なる他の物件の探求を之れが爲めに犠牲たらしむることなくして見積りせられたる目的物の探求に使用し得る其の苦痛及び其の時間の部分、或ひは一言を以つて是れ等の兩者を言ひ現せば、其の能力の部分に關して自己に致せる報告に外ならざるものである。然らば、其の價值の尺度は何であるか。彼れの比較の物差は何であるか。そが其の能力其の者以外に存しないことは明かである。

ある。其の能力の總量が這般の物差の唯一の「單位」であり、彼れの出發し得る唯一の定點であり、而して、各個の目的物に賦與する「價值」は這般の物差の比例的部分である。孤立人に對する一の目的物の「見積價值」は精確に、彼れが其の目的物に對して有する願望に相應する其の能力の總體中の一部分、又は、彼れが斯くの如き願望を満足するが爲めに使用し得る其の能力總量中の一部分であると言ふことに爲る。人は、言葉を換へて、是れを以つて人間の能力の全體に對する比例的部分の割合、價值の單位を分子とし、價值の數、即ち人間の全能力を構成す可き均等なる比例的部分を表示する數を分母として有す可き分數によつて表明せらる可き比率であると稱し得可きものである。爰に、チェルゴオは「總べての價值の尺度は人間である」と稱した前掲ガリアニの *Della Moneta* 及びグラスラ *Essai analytique* を引用してゐる。(Ibid., p. 87-88.)

次いで、チェルゴオは交換價值を明かにするが爲めに北海の唯中に於ける無人島に置かれた二個の人間を想像する。一人は魚肉の過剰を、他は生皮の過剰を有する。一人は寒さを免れ、他は空腹を避くるが爲めに、彼れ等は各々他の者より其の過剰を要求し、他の者は之れを承諾す可く、茲に「交換」は發生し、商業は起る。斯くの如き場合に於いて生じた所のものは、他の状態の下に於いては無用なる兩貨物の餘剩部分が、其の所有者の眼中に在つて其の囊きに有することのなかつた價值を取得せることであつた。各人は「自身の」欲望 (*Desoin personnel*) を有せざる所のものに對して「値積り」したのである。斯くの如き最初の状態の下に於いては、交換の條件に關する争論はさまざまで激しくはないであらう。餘剩の魚肉の全部は餘剩の毛皮の全部に對して與へらる可きであらう。然しながら、少

しく此の假定を變ぜしめて、是れ等兩人の各々に與ふるに、其の餘剰に對して價値を附せしむるの動機たる、之れを保管するの利益を以つてし、一方は魚肉の代りに、極めて長く保存せられ得る玉蜀黍を齎し、他は生皮の代りに、薪を齎し、而して、其の高は穀物も薪も共に之れを産することがないとする。暴風期の如き不利なる状態に由つて、兩者の孰れも其れ以上の供給を受くるが爲めに大陸に歸ることを不可能ならしめられるとする。玉蜀黍を有する人は凍死を防ぐが爲めに薪を要し、薪の所有者は餓死を免れんが爲めに玉蜀黍を願望する。茲に交換の要は大であるが、各人は自己の有する所のものを保存し、而して自己の有せざる所のものを取得する其の利益を決定するが爲めに、兩欲望の力を計算するであらう。一言にして云へば、彼れは自己に關して「見積價值」を極めて精確に決定するであらう。此の「見積價值」は彼れが自己の爲めに兩物件を取得するに於いて有する「利益」に比例するものであり、而して、兩「價値」の比較は明かに兩「利益」の比較に外ならざるものである。各人は又、自己の持つ物を出來得る限り多く保留し、而して他人の物を出來得る限り多く取得するの一般的利益によつて促される。斯くの如き見解に於いて、各人は自己の見積價值を秘密に附し、提供する所を少くし、要求する所を大にして、其の欲望する物件の所有者に索りを入れる。彼れ等は交換條件に就いて爭論する。而も、兩者は契約の締結に大なる利益を有するが故に、彼れ等は遂に同意するに至る可きである。例へて言へば、彼れ等は五抱の薪に對して四抱の玉蜀黍を交換する。交換の行はるゝ瞬間に於いて、各人は疑ひもなく、彼れの與ふる所のものに對するよりも、其の受くる所のものに對して更らに高き見積價值を置くのである。讓渡せらるゝ物件に對して取得せらるゝ物件に取得者の賦與する「見積

價値」の優越は、交換の唯一の誘因なるが故に、そは之れに取つて缺く可らざるものである。各人は彼れにして若し交換を行ふことに一の利益、一の個人的利潤を看出すことがなかつたならば、依然現狀を維持す可きである。而して、チェルゴオは、此の利得が各々の側に於いて、精確に相等しきことを主張する。即ち、若し、そが等しくないならば、兩者の一方は他に比して交換を欲すること少なかる可く、而して他をして其の提供する所を大ならしめて、其の價格に接近せしむることを餘儀なからしむ可きである。斯くて各人が「等しき價値」を受くるに對して「等しき價値」を與ふることは正さに真たるを失はないのである。(ibid., p. 89-91)。

是に至つてチェルゴオは這箇自由なる交換の必要條件たる均等性を有する「交換價値」(valeur échangeable)の何たるかを精確に知らんとする。そは精確に「見積價值」と同一なるものではない。即ち、「見積價值」の決定に際しては、各人は別々に二個の利益、彼れの所持する物件と彼れの所持せんことを願望するものと賦與する二個の利益を比較したに過ぎない。「交換價値」の決定に際しては、比較を行ひつゝある二個の人と、比較せらるゝ四個の利益とが存する。兩契約者各個の兩利益は初め彼れ等の間に於いて別々に比較せられ、而して、是れ等の兩結果が相共に比較せられ、否、寧ろ是れ等兩契約者によつて相争はれて、精確に「交換價値」と爲る所の「中庸見積價值」(valeur estimative moyenne)を形成することゝ爲る。而して吾人は之れに對して「評價價値」(valeur appréciative)なる名稱を與へ得可きである。蓋し、そは「價格」即ち交換の條件を決定するが故である。「評價價値」——交換せらるゝ二物間に於ける相等しき價値——は「見積價值」と本質上同一性質のものではあるが、そは、中庸の見積價值たるの點

に於いて之れと相違する。吾人は曩きに、孤獨の人に對する一物件の「見積價值」は、或る人が此の物件の探求に捧げ得る其の能力の一部と其の能力の全部との間の比率に外ならざることを立證した。然らば、兩人間の交換に於ける評價價值は、彼れ等が甘んじて交換の目的物の各々の探求に捧げんとする能力部分の總額と是れ等兩人の能力の總額との間の比率である。チユルゴオは見積價值及び評價價值の兩者を能力の名辭に歸せしむるに由つて、交換價值が個人的評價の結果に外ならざることを示したのである。「評價價值」は、或る人々の思惟し勝ちなるが如く、交換せらるゝ二物間、若しくは價格と賣却せらるゝ物件との間の比率ではない。其處には均等の關係が存し、而して這箇均等の關係は豫ねて相等しき二物を想定する。然るに、這般の相等しき二物は交換せらるゝ二物ではなくして、當然交換せらるゝ物の價值である。吾人は均等の關係を有する價值を以つて、比較せらるゝ兩價值を想定する這箇均等の關係と混同してはならぬ。(ibid., p. 91-93)。

チユルゴオは更らに進んで、價值と價格との相違に就いて述べる。「價格」は他物と交換に與ふる物である。價值は其れ自體に於いては言ひ表すことを得ない。實際に、第一の名辭、即ち分子たる基本單位が見積り得るものであり、又、最も漠然たる態様に於いても識られざる比率の表現は如何にして看出されるか。或る目的物の價值が人間の能力の百分の二に相當すると如何にして述べられ得るか、又如何なる能力に就いて言はるか。慥かに這般の能力の計算には時間の考察を參加せしめなければならぬが、如何なる間隙を定置す可きであるか。數多き種々なる使用法に對する其の關係に於いて時間を見積ることは困難であり、又、自然によつて與へらるゝ「基本的單位」(unité

fondamentale)は存することなくして、「恣意的單位」(unité arbitraire)及び因襲的單位のみが存する。斯くて、自己の名辭に於いて價值を表明することは不可能であるが、價格によつて、即ち購入せらるゝ物に對して與へらるゝ所のものゝ數量を述ぶるに由つて、若しくは一物件の一定の數量は他の物件の一定の數量に對して價值に於いて相等しと稱するによつて表明せらるゝことを得、又、表明せらるゝのである。總べての交換に於いて、交換せらるゝ物件の各數量は、價格として、又、他の物の價值を表明するが爲めに相互的に役立つが故に、「價值」及び「價格」なる兩語を交互的に使用するは、正さに普通の用語としては許さる可きであるが、而も、是れ等の兩語は本質的に相違せる觀念を表明するものである。他の物件と交換に與へらるゝ或る物件の整數分の數は、佛蘭西の *mesure* (尺度の名)が西班牙の *vars* を測定する以上に、其の物件の價值を測定することがないのである、(後者は前者の名辭に於いて表明せられ得るのであるが)。這般の理論は極めて單純なるものではあるが、かのジョン・ローの有名なる計畫に於けるが如く、屢々頌る優れた人々によつてすら誤解せられ、政府をして失政に陥らしめたのである。(ibid., p. 93-96)。

チユルゴオは更らに其の條件を複雑ならしめる。彼れは二人の代りに四人を想像するも、物件は依然玉蜀黍及び薪の二種である。是れ等の四人が互に分離せられたる對偶に分割せらるゝならば、二個の相異なる評價價值が存す可きである。而も、そは各人が各個の場合に於いて與へられた等しき價值に對して等しき價值を取得することを妨げることがない。今、四人が一緒と爲り、斯くの如き交換の割合を知悉するとしたならば、交換の條件は直ちに變

化す可きである。薪の價值及び玉蜀黍の其れに關して新たなる「値積」、新たなる評價が形成せらる可きである。それは兩交換に在つて、又、四契約者に對して同一なる可きである。各個の交換に在つて、同一量の薪は、同一量の玉蜀黍に對して與へらる可きである。蓋し、玉蜀黍の一人の所有者が同一量の玉蜀黍に對して他よりも少なき薪を受くるとしたならば薪の兩所有者は斯くの如き値下げの利潤に依つて彼れに交換を求む可きが故である。是に於いて乎、彼れは薪に對する其の要求を引き上げ、他方に於いて、他の玉蜀黍所有者は其の要求を引き下ぐ可きである。而して、這般の作用は玉蜀黍の兩所有者が薪の同一量に對して同一量を提供するに至る迄持續す可きである。此の點に於いて、チュルゴオの未定稿「價值及び貨幣」の筆は絶たれてゐる。(Ibid. p. cit., p. 96-98.)

彼れの所論が是れより進んで如何なる發展を爲す可きかは固より吾人の想像を逞うし得ざる所ではあるが、恐らくは、前記の如く、其の假定を次第に複雑ならしめて、取引に参加する者の數益々増加し、競争が愈々完全と爲るに連れて交換比率の相違は益々減少せしめられ、結局、市場の駆引は、總べての者が交換を行ふ可き單一の交換比率を生じ、均衡を生ず可き唯一の割合の存することを看出し、更らに物々交換の當事者等が交換せんとしつゝある物件を勞作に依つて取得し得る場合を推想し、以つて、後世の所謂「正常價格」の概念に到達し、效用法則と費用法則との連絡を發見せんとしたのではあるまいか。而して、彼れは其の經濟上の處女論文二千七百四十九年四月七日附 Lettre a L'Abbé de Cice. (Œuvres, op. cit., Tome I, 1913, p. 143-151.) 以來の持論たる「商品の一種として、貨幣は他種の商品の記號に非ずして、其の共通の尺度であると云ふ主張に基き、又、其の『省察』に於けるが如く、

貨幣及び貴金屬の價值が供給及び需要に従つて變化することを主張し、(cf. *Reflexions*, § xiv.) 以つて價值は貨幣の名辭に於いて表明せられ、若しくは命名せらるゝを得るのであるが、而も其の稱號は是れ等のものゝ量ではなくして、そは唯り之れを生産するに必要な人間の能力によつて測定せらるゝことを得る旨を詳説せんとせるものはあるまいか。

之れを要するに、近世始期より第十八世紀末に到る價值學説は、多く、幣政の混亂に當面せる論者が、其の貨幣論の前提として表明せるものであつて、一切の生産物の測定せらる可き共通の標準を需要なりと做し而して其の代理者を貨幣に求めたるアリストテレスの所論を出發點として、價值形態のより以上の分析に進まんとせるものである。而して其の間に於いて、單なる需要供給均衡論に満足せずして、經濟事象の心理學的考察を行はんとする者を出したのであるが、而も、限界效用價值説への道程は尙ほ甚だ遠いものであつた。コンディヤックに至つて斯學説への接近は幾分大と爲るのであるが、吾人は彼れに就いての叙述を他日に譲る。限界效用學説の眞の發達は之れを第十九世紀に於ける社會主義理論の刺戟に俟たなければならぬ。

(附記) 余が本稿中に於いて稍や詳細に紹介せるチュルゴオの未定稿「價值及び貨幣」に就いては、山内毅氏の全譯が本誌第三十二卷第二號に載せられてゐる。尙ほ吾人が聊か關説せるガリアニの「貨幣論」が果して彼れの著作なりや否やの問題に就いては『國民經濟雜誌』第四十七卷第一號に手塚壽郎氏の考證論文「ガリアニの *Dix Mille* に就いて」が載せられてゐる。